

〔研究論文〕

東井義雄からの警鐘

赤坂 雅裕

〔Article〕

A Warning from Yoshio Toui

Masahiro AKASAKA

Abstract

This paper attempts to lead in new developments in education in Japan based on Yoshio Toui approach and practices.

1. はじめに

「見えるところばかりを気にし飾る子どもを育ててはいはしないか」。25歳の時であった。私は、G校長の紹介で、東井義雄と出会う。心がしびれた。涙が止まらなかった。私は、東井の著作を貪り読んだ。

『困った子』『問題の子』といわれてきた子どもから学ぼう。きっと、きっと、どんな偉い教育学の先生も教えてくれない教育のほんとうの在り方をあなたに教えるために出現してくれているのですよ。

「どの子ども子どもは星。みんなそれぞれがそれぞれの光りをいただいてまばたきしている。ぼくの光りを見てくださいとまばたきしている。わたしの光りも見てくださいとまばたきしている。光りを見てやろう。まばたきに応えてやろう」。

「それなのに、できない子をできるようにする努力もしないで、自信を失っている子どもに自信を育てる努力もしないで、『きみは1だ』『きみは2だ』『きみはCだ』と、子どもをわくづけし、自信を奪い、希望を奪い、子どもの生きがいをさえも奪ってしまうようなことを私たちはやってはいはしないだろうか」。

衝撃の連続であった。読めば読むほど、私は東井に心を奪われ、感服し、傾倒した。

そして、とうとう手紙を出す。もちろん、お返事を頂くことなど期待していない。ただただ、東井先生のご本を読んで感動したこと・感激したことを伝えたかったのだ。

ところが、どこの誰ともわからない九州の田舎の25歳の中学教師に、東井先生から、返事が届く。

指導や説教ではなく、「ありがとうございました。あなたのような青年教師に出会えましたことに感謝致します。これからの子どもたちをどうぞよろしくお願い致します。合掌」それはそれは丁寧な文字で書かれていた。

それから、1年間の実践を終えるたびに、1年間分の学級通信を冊子にし、東井先生に送り、指導を請うようになった。

『たんぼぼ魂』ご恵送、どうもありがとうございました。いまの中学校の仕組みの中で、こういう実践の積み重ねが、どれだけ困難なことであるかを知っていますだけに、合掌したい思いです。・・・(この学級通信は)赤坂先生のきびしい『私にであう旅』の記録であるという思いがしてまいります。最後のおことばが、しみじみと胸にしみます。たんぼぼのタネが見事に飛翔して、日本の各地で根をおろし花を咲かせてくれることになりましょう。ありがとうございました。合掌」

未熟な実践や、あるいは間違っただけの実践もあったはずである。

しかし、東井先生から、そのような内容に関する指摘をされたことは一度もない。

東井先生は、私の仕事に対する構えを、いつも高く評価してくださり、励ましと、指針を与えてくださった。

私は、東井先生に育てられた。間違いなく、私は東井先生に導かれていた。

「おれは21世紀の東井義雄になる！」

毎朝、学校に向かう車の中で、そう唱えていた。

56歳になる現在でも、その思いは変わらない。

東井義雄に一步でも近づく教育者になりたいと今も念じている。

東井義雄の言葉を読み返し、教育の原点を確認して、間違いのない教育実践を創造していきたい。

本論文が、これからの日本の教育が、「子どもたちを幸せに導く教育」に向上していく、その契機になることを切に願う。

2. 東井義雄の生涯

東井義雄(1912-1991)は姫路師範学校卒業後、40年間に渡り兵庫県下の小学校、中学校に勤務した教師である。

以下のような賞を受賞している。

- ・ペスタロッツ賞(広島大学)
- ・平和文化賞(神戸新聞社)
- ・小砂丘忠義賞(日本作文の会)
- ・教育功労賞(文部省)

著作は、公刊されているものに限っても、著書47冊(共著を含む)、論文・実践記録214編を数える。

東井義雄の生涯と、主要著作を見てみよう。

1912年	兵庫県出石郡「東光寺」の長男として生まれる。
1918年(7歳)	母(初枝33歳)と死別
1923年(11歳)	苦学し、小学5年生で中学(旧制)入試資格試験に合格するが、貧しさのため父の許しが出ず、進学を諦める。
1927年(15歳)	兵庫県姫路師範学校に入学

1932年(20歳)	豊岡市豊岡尋常高等小学校に訓導として着任 在職10年間、一貫して「生活綴り方」教育に情熱を傾ける。
1944年	『学童の臣民感覚』(日本放送出版協会)
1947年(35歳)	相田小学校に着任 在職14年間、書くことを中心とした「ほんものの教育」を志向する。
1957年	『村を育てる学習』(明治図書)
1959年(47歳)	広島大学より「ペスタロッチー賞」を受ける。 12月に相田小学校校長となる。
1961年(49歳)	但東町立高橋中学に校長として着任
1964年(52歳)	八鹿町立八鹿小学校に校長として着任 「教科の論理」や「生活の論理」を追究する実践活動に取り組む。
1967年	『「通信簿」の改造—教育正常化の実践的展開』(明治図書)
1972年(60歳)	定年により八鹿町立八鹿小学校校長を最後に退職 『東井義雄著作集1～6』(明治図書)
1973年(61歳)	姫路学院女子短期大学の講師を務めるかわら、本格的な講演活動に入る。
1976年	『根を養えば樹は自ずから育つ』(柏樹社)
1979年	『子どもの何を知っているか』(明治図書) 『いのちの芽を育てる』(柏樹社)
1983年(71歳)	兵庫教育大学大学院の非常勤講師となる。 『どの子どもも必ず救われる』(明治図書)
1987年(75歳)	姫路学院女子短期大学、兵庫教育大学大学院の講師を辞し、55年間におよぶ教職生活を終える。 『いのちの根を育てる教育』(国土社)
1990年	『喜びの種をまこう』(柏樹社)
1991年(79歳)	逝去

3. 東井義雄をいまに生かす

東井義雄は、本来、静かな穏やかな人間である。

しかし、真の学力観と人間評価の問題となると、いつも火を吐くごとき気迫をもって語った。

第一義である子どもの幸せのために役立つものであれば食欲に取り入れるが、子どもに害をなすものに対しては容赦しないというのが、東井の姿勢であった。

東井義雄の言葉と生き様には、現在、混迷の中にある日本の教育に正しい指針や勇気を与えてくれるものがある。

東井の言葉を深く読み直し、我々の心を磨きあげて、子どもを幸せに導く教育を創造していききたい。

(1) どの子どもどこかに値打ちを持っている

人間に屑（くず）はありません。誰でもどこかに値うちを持っているものです。子どももそうです。その値うちを見つけ自信と誇りを育ててやれば、やけをおこしたり、グラグラすることはなくなるものです。

『母のいのち子のいのち』 p158

我々には、子どもの真実を見極めるということより、教師としての感情が先走ってしまい、「この子はダメだ。どうしようもない子だ」と決めつけてしまう傾向があるのではないだろうか。

この傾向は、世間から「真面目で熱心な先生」と言われている教師ほど強くあるように思う。

ゆとりをもって、いろいろの角度から子どものことを考えてみるということができないのだ。一本気で真面目すぎるのだ。

熱血教師というのは、一般に歓迎されるが、この「熱血」が子どもの真実を見誤らせることが多い。現象面だけを見て、思わずカッとになってしまうからだ。

問題を起こす子ども問題を起こしたくてしているのではない。子どもは、様々な家庭事情を背負って学校に来ているのだ。ほんとうの子どもは、そのもうひとつ向こうにいる。

教師というものは、ほんとうの子どもが見えなくて失敗ばかりしているのかもしれない。

まったく気づいていないところで、たくさんの失敗をし、子どもを泣かせているのかもしれない。

東井は、そういう自分を知らせてもらうために、子どもに文を書かせている。

そして、子どもから学ばせてもらっている。

東井は、子どもの書いたものを見ることを通して、子どもを見る目を徐々に変革していった。

「即効薬にはならないかもしれないが、私は、私の体験から、子どもの日記を見てやるとか、生活やその思いを書かせてみるとか、ぜひ、そのことをお勧めしたい。子どもの作文から学ぼう」と言う。

「どの子ども子どもは星」である。

その子のキラリと光るもの、その子の値打ち、これを見出すことからしか教育は始まらない。光りを見てくれる教師に出会った子どもの星は、存分に光りを放たずにはおれなくなる。

子どもを含むすべての人間の中に仏性を観る、というところが、東井義雄の子ども観・人間観の根底にある。東井の教育実践はこの子ども観・人間観を中心として展開されているといえるだろう。

(2) 教育という仕事

念願しているものは何か、とつきつめて考えてみると、「子どもたちが、なんとか、しあわせになってくれるように・・・」という願いにつきあたってくるのではないか。そして、そのためには、なんとかして、そのしあわせを築き得るような力を、子どもの上に育てあげてやりたいものだと、念じているのではないか。

『村を育てる学力』 p48

これからの子どもたちは、私たちが生きてきた時代より、もっともっと大変な時代を幸せに生きなければならない。

その子どもたちに、どんな厳しい時代がやって来ても、間違いなく幸せに生き抜いてくれるように教育の仕事がある。

東井は、「教育という仕事は、何がまちがっても、絶対まちがいがなくやってくる、子どもについていってやることでできなくなる日のことを考え、いつその日がきても、まちがいがなく、自分の二本の脚で歩けるように子どもを育てる仕事」と言っている。

どんなにできの悪い子も、どんなに大変なやんちゃな子も、反抗的な子も、生きがいを見失って暴れている子にも、自分の二本の脚で歩けるようにするためには、まずは、自分の人生を自分で切り拓いていかねばならない、という「目覚め」が必要である。

そのために、東井は、赴任した小学校での最初の校長講話で、

「私がこの学校にやってきて、みんなに頼みたい第一のことは、仕事でも、勉強でも、だれに言われなくたって、『だって僕たちの学校だもん、僕の勉強だもん』というようになつづやき方でやれる、仕事や勉強の主人公になってほしいということです」

と語っている。

東井校長の講話は、わかりやすいものであった。わかりやすい平易な言葉で語られているが、そこには、子どもたちの課題、教師の取り組まなければならない方向が見事に示されている。

「主人公」になって物事に取り組むなかで、「目覚め」が得られ、ほんものの生きる力が育まれていくのである。

東井の口癖は、「学校の第一義のものは子ども」であった。

「学校は子どものためにあるのです。先生は、子どものためにあるのです。学校や先生のために、子どもがあるのではないのです」という信念が、東井を貫いていた。

普段は教員にあれこれ口出しをしない東井校長だったが、職員会議の最後に「子どものためにはどうすればいいか」ということを投げかけていた。

これが、判断の基準となり、東井の学校では、修学旅行や運動会のあり方はもちろん、卒業式や入学式の進め方等が検討され、変えられていく。

授業についても、本当に子どものためにはどんな授業がいいのか、と研修が進められる。

「通信簿は子どもの勉強意欲につながっているのか、かえって意欲を失わせるものではないのか。いくら頑張っても、2が3にならない子はダメな子なのか」と、「第一義は子ども」の精神のもと、通信簿も検討されていく。

「学校の名前なんかちっとも上がらなくてもいいんです。子どもが『八鹿小学校に学んでよかった』と言ってくれるような学校を築いていきましょう。」

「国語研究の学校とか、体育の学校とかの看板をあげる必要は少しもありません。強いてあげるなら、子どもを大事にしているという看板をあげましょう。」

『この子さえいてくれなければ・・・』と考えたことのある子どもを『この子がいてくれるおか

げで・・・』と位置づけたときから教育は始まるのです。」

教育という仕事は、現代の日本ではどう捉えられているのであろうか。

東井義雄の言葉から、再考し、自分の実践している教育を見つめ直してみる必要がある。

子どもを幸せに導く教育を力強く進めることができているだろうか、子どもを不幸せにする間違った教育を行っていないだろうか、と。

(3) 奴隷の学習

貧乏な但東町が、願いをこめて、教育費を捻出しているのに、東京の方の先生が考えた問題にひきまわされる奴隷の学習をさせていい気になっていいのか？というのが、私の大きな問題であったからである。

もちろん、指導要領も教科書も大切にしなければならないが、それを、ほんとうに活かす道をこそ教師は絶えず求めて進むべきであると私は考えてきた。

『子どもの何を知っているか』 p166

「教科書にあるからといって『教材』ではない。それは一つの『素材』である。この『素材』を使って、この子どもたちを、こういう子どもに育てあげてやりたいという、教師のやむにやまれぬ願いにたって『素材』が取り上げられたとき、はじめて、それが、命を持って子どもに働きかけ、子どもの命を練り上げる『教材』になってくれるのだ」と、東井は言う。

私たちが生きてきた時代より、もっともっと厳しい時代をこれからの子どもたちは生きていかねばならない。

単に、生き抜くだけでなく、私たちが創り得なかった素晴らしい平和な世界を創りあげてくれないといけない。

そういうグローバル社会を生きねばならない子どもたちに、入学試験さえパスすればいいというような浅薄な学力ではなく、厳しい世界を生き抜く力としての学力、素晴らしい未来を創る力としてのほんものの学力を育てていかねばならない。

我々は、そういう、ほんものの学力を目指した実践に日々取り組んでいるであろうか。

文科省が指導要領を改訂すれば、大騒ぎし、それを理解し、なんとか追いつこうとする。文科省に追従するのに精一杯。そんな受け身的で情けない実践になっていないだろうか。

学習指導要領は、最低基準である。それを踏まえ、それ以上の、私の学校の子どものに応じた実践を主体的・意欲的に創造していいのだ。いや、しなければならないのだ。

東井義雄の、「東京の方の先生が考えた問題にひきまわされる奴隷の学習をさせていい気になっていいのか」という気迫と、この教師としての「自立」を学ばねばならない。

我々は、授業・行事を通して、子どもにほんものの学力を身につけさせようとしているだろうか。東井のこの真剣さに一歩でも近づきたい。

文科省が提示した「課題」を、学者や教育委員会が提案した方法によって解決していくことしかで

きないような、そんな甘ったれ教師ではダメだ、と東井の声が聞こえてきそうである。

さて、東井の教育の根幹には、「人生は厳しいのだ。その厳しい人生を、“身自らこれに当たる。代わる者あることなし”で、自分一人の力で生きねばならぬのだ。その自覚をなんとかして育てなければならぬ」という課題があった。

そして、厳しい人生を自分の力で生き抜くために、子どもたちが、何事も、教師の指示がなくてもやらずにおれないという方向に進んでくれるよう念願していた。

教師が発した「問い」を、教師が整えたお膳立てによって考えていくことしかできないような受け身で主体性のない子どもでは、到底この厳しい21世紀を生き抜けない。

東井は、「各教科の在り方を、全面的に考え直さねばならぬだろう。ものしりをつくり上げる教育体系でなしに、身のまわりの事物を、算数は算数の立場で、はてな？と不思議がり、こうかもしれないぞと考え、こうしてみたらどうか、と、実際にやってみ、なるほどどうなずき、でも、いつでもどこでもそうなるか、とためしてみるというような行き方を、もっともっただいじにしなければならぬし、理科は、理科の立場から、はてな、おやおや、なぜだろう、こうかもしれないぞ、こうしてみたらどうなるか、なるほど、でも・・・、と考え、考えてやってみる、というような在り方をだいじにしなければならぬ」と訴え、ほんとうの学習を展開している。

この視点から、宿題に関しても、「考える子どもを育てる宿題」に取り組み、子どもの自主性を信じて、「させられる」という強制の部分をできるだけ少なくし、「させられる仕事」を「する仕事」に変えさせる部面をたくさん残しておくというものになっている。

「させられる仕事」が「する仕事」に変わったとき、「苦」であるはずのものが「喜び」に変わるという信念からである。

東井は、「子どもの方から考えて『あの先生に学んだころ、学ぶ喜びを身につけた』と思われるような『教師のあり方』を、教師は求めるべきだ」と言う。

「『教師が指示してさせる家庭学習』という意味を持った宿題が、指示はなくても、やらずにおれないように『教師が育てた家庭学習』という宿題になることを目指すべきだ」と主張している。

子どもが問題を持ち、子どもが何が本当であるかを追求していくように子どもを育てるのが教師の仕事である。

宿題ひとつにしても、東井らの先行実践を踏まえて、間違いのない実践を行いたい。

(4)この子らに必要なことを教える

そこで、私は決心した。

教室から有閑文字を追い出そう。有閑文字を相手にすまい。

そして、この子らに必要な実用文だけを教えよう、と。

『現代国語教育論集成 東井義雄』p72

東井義雄は、特別支援学級の担任になり、その子らから多くのことを学んでいる。

- おくれた子どもたちの教室から見ると、教育界というところは、不必要なもの・役立たないもの・にせもの・有閑的なものが、ずいぶんのさばっているところだと思われた。
- 子どもにほんとうの力をつけ、子どもを高めるためのではなく、ただ形をととのえるための方策・帳簿の何と多いことだろうと思った。どうしても必要な、やむにやまれぬ、ではなく、どうでもいい行事が、どうしてこんなに次々に思いつかれるのだろうと思われた。
- そしてまた形象理論だとか、生活観照だとか、境地だとか、深みだとか、どうしてこんなにありがたげな、そのくせわけのわからぬ、どうでもいい思潮が多いのだろうかと思われた。
- 子どもが生きているということ、今生きているだけでなく、これからのむずかしい世の中を生き抜いてくれなければならぬその子どもを踏まえ、その子どもが真に必要なとするものから教育が出直したら、どんなに愉快だろうと思った。
××科方案作成委員会に出ても、いかにも論理的に、いかにも体系的に案がつくられてはいるが、これによって、あのおくれた子どもたちがどうなるだろうか、どれだけのおかげを受けるだろうかと考えてみると、腹が立った。

東井は素直で正直である。誠実である。実直で勇気がある。

子どもを第一義としない現実に腹を立て、有閑文字を相手にせず、自分のクラスの子に必要な実用文だけ教えることを決意する。

東井義雄は、ニセモノを嫌い、徹底してホンモノを求めた。東井義雄は、本当の学力、本当の授業、本当の教育、本当の豊かさを追求した。

具体的には、以下の3点に取り組んだといえよう。

- ①子どもを幸せにしようとした。
- ②そのために、まず、子どもの心にスイッチを入れようとした。
子どもが自分の人生の主人公になって、自分で自分の人生を築いていくように、鉛筆対談などを通じて支援した。通知表の改革もこれに当てはまる。
- ③ほんとうの生きて働く学力をつけようと、授業・行事をほんものにしようとした。

このようなウソのない、実直で、「魂」を込めた実践を我々はできているのであろうか。テスト範囲を満遍なく教えることで、それでよし、としていないか。

東井は、本当の学力を身につけさせようと、「一斉学習の中でよく活動したり、ペーパーテストでいい成績をとったぐらいのことでいい気にならせてしまってはならないと思った。そこで私の考えたことは、ひとりひとりの子どもにどんどん調べさせることであつた」と考え、各教科にわたって「調べる学習」を展開している。

一人ひとりの調べ学習を通してこそ、ほんとうの生きて働く学力を身につけさせることができると考えたのだ。

その学習を始めるにあたり、東井は以下のような刷り物を子どもに配り、勉強の心構えと、調べ

る方法を教えている。

- ぼくたちは日本の子どもだ。日本はぼくらの国だ。日本のことなら、山も川も町も都も、何でも知っていなければならぬ。
あそこの山では、日本の仲間がどんなにがんばってしてくれるか、あそこの海では、仲間がどんなに働いてしてくれるか、ちゃんと知っていなければならぬ。
- そして仲間たちのがんばりをはげましながら、こちらもがんばらねばならぬ。
そこはもっとこうの方がよかろう。ここはどうしたらがんばれようかと、たがいに工夫しあいながら、ぼくらの国日本を、もっともっといい国にしなければならぬ。地理の勉強は、そのための勉強だ。
- だから、まず、
- ①その土地のようす（区域、地勢）を調べねばならぬ。それから、
 - ②その土地で、仲間が、どんなに工夫し、・・・
- ぼくらは日本人だ。日本をうけついで日本を護り、日本を立派にするためにぼくらは日本の地理を勉強する。
さて、こんな心構えで勉強するぼくらの地理のノートは、どんな使い方になるだろうか。

この刷り物の内容から、明らかなように、東井は、学習の基盤に、国土や社会に対する「愛」を据えつけている。「村を捨てる学力」ではなく、「村を育てる学力」を育てようとしている。みじめな村を見捨てず、愛し育て得るような、主体性をもった学力を育てようとしている。

学習の基盤に、「自分」ではなく「公的なものへの奉仕」を置いていることの、この気高さ。「愛」に立つ、こんな崇高な実践は、現在の日本にあるだろうか。私は知らない。

(5)「教える教育」の限界

「先生」と呼ばれるようになって25年、わたしという教師は、よっぽどのろまな教師にちがいない。この年になって漸くわかって来たことは、「教える教育」には限界があるということだ。

『村を育てる学力』p118

『村を育てる学力』は、宮坂哲文に、「全教師の感動をゆさぶる現代教育実践の金字塔」と言われたが、この『村を育てる学力』から、東井義雄の実践・理論の特質を、以下の3点にまとめることができる。と考える。

- ①「生きていることのただごとでなさ」「いのち」の自覚に基づき、その「いのち」の現れである、一人一人の児童の思い方・考え方を何よりも重視する、自己教育の立場に貫かれたものである。
- 「教える教育」には限界がある。「私は私の主人公」の学習にならねば、ほんものの学習と

ならない。

また、「村を育てる学習」のように「愛」に立つ学習でないとほんものにならないとしていること。

- ②「書く」ことを中心とし、その機能を十分に生かしながら、学習内容を子どもの生活上の問題としてたぐりよせ、自分の問題として考えさせ分らせる、子どもの内面活動を重視していること。
- ③学習主体の確立と集団の中での解放とが図られた上で展開される、学習の結果のみではなく、過程をも重視するものであること。

東井は、求道的ともいえる厳しさを持って、「教える教育」の限界を克服しようとする。

詰め込みで教え込み、テスト、テストで点取り競争をさせても、ほんとうの学力は育たない。

東井は、表層としての知的認識・技能的認識を、それらを支える内的能力としての感性的認識・情意的認識から問題にし、「書くこと＝作文(綴り方)」を中心とした「自分にひきよせ、自分のものとして考える」方法によって主体化させ、「教える教育」の限界を突破しようとした。

それは、「子どもを大切にする授業」「おもしろい授業」等といった安易な言葉では捉えることのできない、宗教的とも言える厳しさをもったものであった。

そして、東井独自の「ひとりしらべ」→「わけあいみがきあい」→「ひとりしらべ」という指導過程も創出していく。

このような「ほんものの教育」への努力が、書くこと＝作文(綴り方)を媒介として、子どもの学びたいという心と共振し共鳴するところに、東井義雄の教育(授業)が成り立っていく。

そして、子どもの中に、「足を運び、手を使い、頭を働かせ、からだ中をぶっつけて研究している。わかってもらわなくてもまる暗記してそれでおしまい、というような、頭だけの勉強はしていない」という姿が見られるようになっていく。

東井は、教科を(たとえば国語教育を)狭く一教科の問題とはせず、教育全体、さらには学習者の人格的な発達や生活のすべてと関わるるところから捉えようとした。

そのような考え方に基づく「体で読み、体で書く」教育、生活上の問題としての、生活の延長としての教育を探究した。

東井義雄の授業実践は、皮相な教育技術や教育方法の次元で捉えられるべき性格のものではなかった。

(6)「人間の回復」のために

「人間の回復」のためには、子どもたちを「させられる立場」に放置しておいてはならない。

『いのちの根を育てる学力』 p155

東井義雄は中学校に校長として赴任し、その授業の有り様に驚く。

「中学校に行って、一番強く感じたことは、猛烈なキカンジュウ式授業であった。それが、何の疑いもなく行われていることであった。そして、生徒は・・・という、まるで、敵の前に引き据

えられた捕りよであった。これでは、『人間破壊』の授業であると思った。教えた、ということにはなっても、学んだということにはならないと感じた。」

「猛烈なキカンジュウ式授業」では、入学試験用の学力・点取り学力を養うことはできても、ほんものの学力を育てることはできない。ただ得点につながればいいという、点取り学力、入学試験用の学力ではなく、人間そのものを育てる学力をこそ目指すべきであるとする東井には、この中学校の授業は到底受け入れることのできないものであった。

子どもの「力」の中のほんの一部分を数字で示して、その点数で子どもの値打ちづけをしてしまうから、親たちも、世の中も、その一部分に狂奔して、「人間」としてもっとも大切なものを育てることを忘れ、この「人間破壊」の「キカンジュウ式授業」が行われているのだ、と東井は考えた。

そこで、「人間の回復」を図るために、東井は以下の3点に取り組む。

①「人間の回復」は、まず、大人の「人間回復」から

「『新しさ』を追っかけることが『人間』を忘れることになってはならない。『新しい』『古い』は、いずれにしても大した問題ではない。『何が真実であるか』『何が真理であるか』『真理・真実』に対してもっと謙虚になり学ぶ姿勢を大切に」ということを、学校から毎月出している「親・子・教師の文集『はぶが丘』」などで訴えている。

また、運動会などを、「学校が目指している願いをわかってもらう会」「教育といういとなみを考えてもらう会」にし、そこで、大人たちに働きかけている。

②学力観を正し、「生活の論理」と「教科の論理」の止揚統一を目指す授業実践

東井は、「授業」とは、子どもの主観的なものである「思い方・考え方・感じ方」(生活の論理)が、教科の持つ系統性・順次性(教科の論理)を吸収し、より高次の「思い方・考え方・感じ方」(生活の論理)に成長させる営みであるとした。

教科内容が、子どもの個性に根ざした「自分の問題」「自分の課題」として捉えるのでない限り、「授業」が成立したとは考えないのである。

ほんとうの「学力」は、この「生活の論理」が「教科の論理」を完全消化して、「生活の論理」そのものが変革され、客観化され、生きて働く力となったものと捉えている。

そして、「ほんものの学力と、にせものの学力のちがいは、『子どもの生活の論理』を大切にするかどうかで決まる」と言っている。

「いのちといのちのぶつかりあう授業」を。「頭ではなく体で学ぶ学習」を。「『ほんものの学力』が育つ道すじの中で、『人間』そのものが耕やされ、広めら深められる」と提案している。

③行事を「人間回復」のために

東井が校長当時、ほとんどの学校が遠足は慰安観光旅行のようなバス遠足を実施していたようである。

そういう中で、東井は、子どもたち自身に30数キロの徒歩遠足を計画させ、それに挑戦させる、という遠足を実施している。

修学旅行は、「人間回復のための修学旅行」にしようと、6年になると、4月当初から、修学旅

行を念頭において歴史の学習を推し進めていっている。

そして、修学旅行中のバスガイドを頼むことを止めている。

「ガイドが知っているくらいのことは教師が知っているべきであるし、それに、ガイドは、子どもたちの目を塞ぎ、耳を塞ぐ役割を果たす面をもっていると感じたから」というのが、その理由であった。

実際の修学旅行では、「奈良の大仏殿でも、この大きなものを作ったわれわれの先祖のエネルギーは、どんなふうで育てられたか、というような問題を、あそこについている人たちに投げかけて、追求に余念がない」という子どもの姿である。

ガイドの一般的な説明など、到底足もとにも及ばないような質の高い学習を、子どもたちが展開している。

行事に関しては、以下の指摘が鋭い。

- ・「願い」を失った行事が増えている。
- ・「行事」というものは、他の「行事」とも「授業」とも、つながりあい、活かしあうものでなくてはならないのに、孤立したものになってしまったり、壊しあうものになってしまっている。
- ・「させられる立場」にいた者が「する立場」に立ってみると、いままで見えなかった世界が見えるようになり、はたらかなかつた頭がはたらくようになる。
「人間の回復」のためには、子どもたちを「させられる立場」に放置しておいてはならない。

当時の、東井の学校に通う子どもの母親から「近ごろ、子どもが、朝、家を出がけに『行ってまいります』の次に『きょうもがんばってくるぜ』ということばをつけ加えるようになりました」という手紙が届く。子どもが、行事や授業の主人公になっているのである。授業ではなかなか救われない子どもも、「行事」の中で救われることがある。

(7) 愛の心をかけてあげる

腹が立っても悲しくても、そういうことをしなければならぬ相手の人をわかってあげ、許してあげ、その上に相手が幸せになるように「愛」の心をかけてあげるのです。

『こころの教え』 p89

東井は、中学校の校長を務めていたとき、中学生と「鉛筆対談」を行っている。あるとき、中学2年生の女子から、「親友とはなれてしまいました」という相談を受ける。中学2年生は友だち関係で大いに悩む時期である。深刻である。

その悩みに対し、東井は、「人と人の暮らしがうまくいくために」というテーマを掲げ、以下の助言を送っている。

○相手をわかってあげる力がなければなりません。

人の悪口を言いふらすような人でも、その人がそうせずにおれない訳があるものです。その訳

をわかってあげるように努力したいと思います。

考えてみると、人の悪口を言いふらすような人は、たいてい、仲良しを持っていないものです。

○悪口を言った人を憎んだり、その人の悪口を他の人にしゃべったりする代わりに、その人の哀れな心の中をわかってあげるようにしてほしいのです。

○相手がいくら悪くても、その人を憎んではいけません。

憎む罪はとても深い罪ですから、相手が傷つくだけでなく、こちらも傷つきます。

憎しみがたまってくると、顔までかわいらしさのない顔になりますし、人からも憎まれるように必ずなるものです。

そうせざるをえない友だちのことをわかってあげよう。友だちを許してやり、友だちが幸せになるように「愛」の心をかけてあげましょう、と語りかけている。

憎しみの反対は「愛」であり、相手の人の幸せを思っただけでなく、あげる心が「愛」である。そういう「愛」の人になりましょう、と指導している。

この「愛の心をかけてあげましょう」という精神は、東井の学校の生徒指導において、至る所に生かされている。

- ・三郎くんは、小学1年生入学の頃から末恐ろしいやんちゃ者と言われていた。
- ・1年生で女子便所のぞきをする。家の金を何千円も持ち出し、無駄遣いをする。授業中は、歩き回ってみんなに乱暴をする。
- ・三郎くんが3年になったとき、井上先生が担任になる。井上先生は、学級開きの日、三郎くんのやんちゃぶりを見て、「ぼくの子どもの頃とそっくりだな」と思う。
- ・井上先生が、「明日から使うぼくたちの教室だからきれいにしておきなさい」というと、真っ先に、三郎くんが「それじゃ、先生ぞうきん貸して」と言いにくる。
- ・井上先生は、(ぞうきんを持ってきていないことを叱るのではなく)、三郎くんがそうじをしようとしてくれていることが嬉しくてしかたがない。
そこで、お母さんに「三郎くんはいい子です。ぞうきんを貸してくれなんて言ってくるんです」と手紙を書く。
- ・いままで、周囲から「この子はいい子だ」と言われたことのないお母さんは感激する。そして、早速、ぞうきんを縫ってやる。
- ・翌日、ぞうきんを見た三郎くんは驚く。「がんばれ、しっかり、しっかり」とぞうきんに太いしゅうがしてあったのだ。
井上先生は、「君、素晴らしいぞうきんをもっているじゃないか。こんな素晴らしいぞうきん、早く東井校長先生に見てもらってこい」と言う。
- ・三郎くんは、仲間を引き連れて、東井校長にぞうきんを見せに行く。
東井校長も嬉しくてたまらない。「これは、何万円出しても買えないぞうきんだぞ。素晴らしい。さあ、この素晴らしいぞうきんをひろげなさい。三郎くんと写真を撮りましょう」と写してやり、写真が出来上がると持ち帰らせている。
- ・その後、三郎くんは席について勉強するようになる。掃除も頑張るようになる。

- ・5月、運動会がある。それまで走るのが遅い三郎くんは、「頭が痛い」などと言って、一度も走ったことがなかったが、この時は、死にもの狂いで走った。成績は、ビリから数えて2番目だったが、井上先生は、飛んで言って、「一番より値打ちがあるぞ」と励ましてやる。
- ・ある日、38度の高熱が出た三郎くんは、「先生の顔を見ずに寝てなんかおれるかい」と言い、家を出る。井上先生は、異常な顔つきに気がつき、びっくりして家へ送り届ける。三郎くんは、「これで、先生の顔を見てきたわい」と叫んで身を投げるようにして、布団の上に横になる。

「三郎くんも本当は悪い子ではなかったのです」と東井は言う。

「心のスイッチさえ入ればどの子も必ず光ります」という信念、担任と生徒との信頼関係、校長や保護者との連携、ここに現代でも通用する生徒指導の原理原則を見出すことができる。愛の心をかける生徒指導。見事である。

4. おわりに

今回、東井の著作や実践を調べ直し、強く「自戒」を迫られるものがあった。たとえば、以下のようなものである。

- ものを言うとき、話をするときには、自分のはっきりわからないようなことまで言おうとすると必ず失敗する。
東井は、自分の心で「本当にそうだ」と頷けなくては言わない、ということ、強く守ってきた。
- みんなが気がついているようなことは、もうこちらは何も言う必要がない。
こちらがものを言うことによって、みんなが何か新しいことに気がついてくれるのでなかったら、ものを言う値打ちはない。
- つまらないことなら言わない方がいい。
- 具体を通じてしか普遍を語らず、またその普遍を必ず希望に結びつけてしか語らない。

授業や講演など、話したり語りかけたりする機会が多いわけであるが、私の口から出る言葉は真実であろうか、価値があるであろうか、人々に勇気や希望を与えることができているであろうか。常に緊張感を持ち、自己を問いただして生きねばならない。

それから、以下の東井の言葉に再会して、今後の自分の教師人生をどう生きるのかを深く考えさせられた。そして、志を新たにすることができた。

- 根のある草は芽をふく。自ら伸びる。花を開く。
根の深さと広がり、樹の高さと広がりになる。
- 見られないことにも耐えられる根っこ。
陽の当たらぬことにも耐えられる根っこ。

踏みつけられることにも耐えられる根っこ。

○根気、根性、性根。それが人間を決定する。

東井は、「根を養えば樹は自ずから育つ」という信念を持ち、子どもたちの、あるいは、教員の「根」を養うことに全力を注いだ。

「21世紀の東井義雄になる！」と、自己に唱えるのが、若い日の毎朝の習慣であった。

56歳になろうとする今、あのとときと同じ熱い思いが蘇る。

一步でも、東井先生に近づきたい。私の教員生活もラストスパートをかける時期になったが、まずは、自らが、教育界の「根っこ」となり、そこから、教職志望学生や先生方が、それぞれの花を咲かせることができるよう根気強く支援していきたい。

見られなくていい。陽が当たらなくていい。自分自身が「根っこ」となる覚悟を固め、踏みつけられても耐え、根気よく、学生や先生方を応援し、それぞれの芽がふき、花が咲くことを、念じていきたい。

そして、東井のように、教職志望学生や先生方の教師としての「根」を育てることに貢献していきたい。

引用・参考文献

- ・東井義雄『村を育てる学力』, 明治図書, 1957.
- ・東井義雄『子どもの何を知っているか』, 明治図書, 1979.
- ・菅原稔編集『現代国語教育論集成 東井義雄』, 明治図書, 1991.
- ・東井義雄『いのちの根を育てる学力』, 国土社, 1987.
- ・東井義雄『根を養えば樹は自ら育つ』, 柏樹社, 1976.
- ・東井義雄『いのちの芽を育てる』, 柏樹社, 1979.
- ・東井義雄『どの子どもも必ず救われる』, 明治図書, 1983.
- ・東井義雄『教師の仕事・仕事の心』, 明治図書, 1984.
- ・東井義雄『子どもを見る目 活かす知恵』, 明治図書, 1986.
- ・東井義雄『いま、教師が問われていること』, 明治図書, 1987.
- ・東井義雄『喜びの種をまこう』, 柏樹社, 1990.
- ・東井義雄『東井義雄詩集』, 探求社, 1989.
- ・東井義雄『東井義雄 「こころ」の教え』, 佼成出版社, 2001.
- ・東井義雄『東井義雄 「いのち」の教え』, 佼成出版社, 1992.
- ・中川真昭『東井義雄さんの軌跡 人が生きる根を育てる』, 本願寺出版社, 2007.
- ・東井義雄『仏さまの願いとお母さん』, 難波別院, 1979.

